

HAND IN HAND

はんど いん はんど

休日がこわい？

■最近、みなさまからのお便りが多く、どれも全部お載せしたいのですが、この換紙数を増やすことまで考えています。とても嬉しいことです。どうぞ、ご返信をお寄せください。

■先日、九州から便せん10数枚にもなる手紙が届きました。40年におよぶ結婚生活に昨年6月、みきりをつけ別居にふみきたM子さん(62才)です。現在一泊きりのアパートで、清掃婦として働く毎日ですが「今ではなぜもと早く家を出なかったかと思うし、「残り少ない人生までも、主人から無能おぼわりされ劣等感にさいなまれ、深い沼におちこんで、はじめにはいあがれぬ状態で」生きたくない」と彼女が言います。それでもふだんは重労働にくたび果て、ぐらすり眠れるが、こうしたゴールデンウィークで休みが続くとついこれからのことを思い悩み不安にかられ夜も眠れなくなり、長い手紙を書いてしまったとありました。

■のんびり骨休めとなるべき休日が、逆に不安と不眠にもたらない状況。これはいくら気持ちを明るくもって解決できるものではありません。M子さんのような人たちが本当に心から「夫と別れたいがた」と言え、休日を安心して過ごせるような時代をめざして、私たち会はがんばりたいと思います。

■M子さんが手紙を書いていた同じゴールデンウィークの一日、東京は代々木公園で、この会初のピクニックを催しました。大人6人、子供7人と小人数でしたが楽しいあつまりでした。子供たちは自転車に乗り、なわとび、ボール投げ、花輪つど川岸で、大人はお弁当をひろげ、おしゃべり。母一人、子一人ではなかなか休日でも家族連れの中にこの空気がないという人たちに、有意義なころみだったようです。こうした輪ももっと広げていきたいと思っております。1982.6.1. 円より子

逐次刊行物

13.2.14

国立女性教育会館

女性教育情報センター

16

離婚講座で再就職が難しいという

声がよくできます。実際、年齢制限はあるし、女性の平均賃金は、男性の58%という低さだし、資格も特技もなく、離婚歴があるだけの女性には、いい就職口はなかなか見つかりません。私たちは、おを大にして、年齢制限のとり払いや、平等な資金や、離婚者への偏見をとり払い、実現化してほしいと思います。とりあえずは、就職口をみつけれ、働いて食べねばなりません。『ないないづくし』から出発して

『ないないづくし』の人生

彼女が父親と幼い時に死別している。これがまず『ないないづくし』の第一だ。第二に学歴がない。中学を卒業と同時に姉結婚をゆずらしてしまひ、以後、11年間も入院をくりかえした。第三には、片師と助産が七本ない。長い入院生活になれてしまふと社会復帰がなくなる。まして、生死を賭ける大手術もしくはならぬ。一度、その手術に失敗した彼女が、再びチャレンジして社会へ出るには想像でもないほどの勇氣がない。たに違ひない。月になってくれ、彼女に「生またい」という希望を手えてくれる医者と出会ったことが

2度目の手術を決意させた。

手術は成功し、片師と七本の助産がないからだと、彼女は社会に出る。それは、その日から自分で稼がなくてはならないことを意味していた。彼女は、私は選れできた社会人。と笑うが、年齢制限にひかかると、新卒ではないということはないづくしの四番目になった。

その上、コネもないし、お金もない。その後、みるみるうちに夫もなく家もないという状況におちいってわたりだ。

仕事と結婚

退院後、「まあ社会人として生まるぞ」という彼女の期待は次から次にくたかれこまう。希望する勤め先が、いざという所で、すべはねられこまうのだ。最後に病院の検査室見習いとしてどうにか勤めることができた。しかし、病後のからだには仕事があつた。次に家政婦協会に登録して、家政婦になった。家事が覚えられるし、よその家庭を知るのは楽しかったが、これも子守りが助産のなにからだにまっすま。こんな時、結婚しようと言ってくる人が現れた。そんなからだで拾てくれる人がいたら良いじゃないの。と人に言われ、気持ちに踏ん切りをつけた。

ところが、夢みた結婚生活には、何の充実感もない。夫に定職がないから、お金もなかった。再び家政婦協会へ行き、彼女が生活をみるか、こうとなつた。それなら本格的に稼がなまよと、からだに負担だと思えるマージャン屋を何も知らずに始めた。気がくた下断で、客の話を

もあもしろく、あげ方2時頃まで働いた。

時、頭に3ヶ所、ハゲができてくるのに気付く。あつて病院へ行く。円形脱毛症。精神的なムリがあったのだらう。その頃、夫は彼女の収入をあるにして、まったく働かなくなつた。それがこころが、だんだん生活費はもち出すし外泊がふえていた。

考えてみると、何の充実感もない毎日だった。手術前の「生またい」という願ひ、医者と一体になつての緊張感、そうしたものがすべて消え失せていた。こんなことではいけない。彼女は、マージャン屋をたたき、市場調査員となる。これは、例えば、ハンバーグを持って家を取り、試食とアンケートをたのみ、後日アンケートの回収をするというふうな仕事である。一票いくらで、いしうけんめいにやれば、それだけ、結構いいお金になつた。そのうえ、歩き回らふおかげで、弱い身体も元気になつていった。

家庭を訪問するのを、いろいろな人に逢つた。知らないやよと、つげんぐに斬る人、お礼を言うてくれる人、何軒か回ると、必ず、やさしい人に会えた。そんな時、病気がふきとが思ひなした。仕事は、順調にいった。

匿名刺しぐくりと世界一をアタック

ある日、テレビを見てみると、風本太郎が出ていて、「集団の女は嫌いだ」と言った。ハッとさせられた。集団の女にはなりたくはないと思つた。さうだ専門職を持つ。しかし、私に何ができるだらう。——ある会社へモニターで、出掛けた時、司会の男の人の聞き方が、へただったことを思ひ出した。私なら、さううまくやれる。さうだ、あれをやまう。——彼女は、匿名刺しぐくりと世界一をアタックした。そして、

